

備陽史探訪

第64号

発行

備陽史探訪の会

福山市多治米町5-19-8

TEL(0849)53-6157

近世村落の 財政運営の一断面

—千田八幡社建立目録の場合—

出内博都

このたび福山市千田町の八幡社が改築されることになった。この機会に正徳三年（一七一三）の改築記録「惣氏八幡社建立目録」を見ることのできた。旧村千田には八幡社が二社あるが、分霊を祭つて後からできたこの社を「惣氏八幡」といつているいきさつはよく分からない。

この記録を見ると、当時の村の財政運営の一端が知られるので紹介したい。ただ、本来四冊あった他の関係記録（諸入用帳、厨子寄進帳、宮木売帳、銀子割宛帳）が無いのと、帳簿の仕組みが現在とは少し違うので、字は読めても内容が分からないことが多い。わずか三〇〇年前足ら

ず前のことが案外、分からないというところを知らさせた。

以下ページをおつて紹介する（①②……は「惣氏八幡社建立目録」のページを示す）。

① 関係職人の名が東梁（棟梁）大工安兵衛以下大工九名、木挽き二名や称（屋根）ふき一名が書かれている。板を引く木挽きがいることに時代性を感じさせる。屋根葺については他の「寛書」によれば、慶安四年（一六五二）以来六回の改築・修理・造築の場合、二〇〇年余りの間は「福山堂山 伝助」とあるのに、このたびだけ「三兵衛」となっている。②③「正徳三年巳七月八幡宮建立目録 合銀六貫六百拾五匁七分五厘諸入用辻 但し与右衛門口後入銀共二」とあり、次に「内」として七項目の記述があるので、これは諸費用の内訳かと思つたら、逆に収入の内訳が記されている（以下数字は簡略化して表記する）。

松平下総守様御領主
元二三匁四分七厘
銀四九匁七分六厘
ご祝儀二御酒代村中へ被下相談之上
預り元利出入。
安部対馬守様御領主
銀七五匁二分
御当家ご祝儀二御酒代被下候右同断。

銀一四八匁七分、八幡宮の木払代。
銀一貫四一四匁三分四厘、村中出銀。
銀六三匁二分八厘、方々氏子寄進。
銀五〇匁九分、村若衆内神入用同。
メ一貫八〇二匁一分八厘。
残四貫八二三匁七分。
午之春不足。但右之銀村相談之上借銀之衆中書出シ。

とある。
このページの「メ」の金額は、七項目の合計と一致しており、「残」は残金という意味でなく、諸費用に對して収入が金が不足して、借金が残つたという意味で、これが翌年、午の年の春支払う不足分だということになる。

また、この借金の保証人として宮座を構成している衆中名を書き出すといっている（この名簿は不明）。ここでは「諸入用」とは収入金のことであり、「辻」は合計という意味

である。こう考えると、但し書きの「後入共二」という意味がよく分かる。

次に松平氏と安部氏の交替は宝永七年（一七一〇）で、改築の年の三年前であるが、松平氏の在任中なにかの祝儀で二三匁余の銀をもらつていたらしい。それが二倍以上の四九匁余になっている。

当時の金融制度はよく分からないが、僅かの期間に二倍以上になるということは一つの不思議である。また新領主安部氏からの祝儀も「同断」とあるから元利をだしたことになる。当時どのような利殖の方法があつたのか、分からないことの一つである。④⑤このページは銀の借用先の一覧表である。

「一銀八百目 村之安右衛門より借用」の形式で、村内六人の他、西浜屋二人、大坂や、引野村、新賀村（備中）などの個人名がでてくる。金額は最高八〇〇目、最低五七目九分である。また、借用とは別に「〇〇口入」という項目が二件あり、そのうち一件は「五二三匁五厘 庄屋太郎兵衛口入」とあるが、「口入」というのはどんなことか、厳密なことは分からないが、代表者が小口の銀を集めて貸したものだらう。

こうして集めた銀について「メ五貫五二九匁八分 借用銀子元利 太郎兵衛よりかりかえ払へり、一銀七一六匁二分午ノ年利銀石之銀主へ払」と記されている。

前のページに四貫余不足とあるのに、ここで五貫余り借りかえて払い、次の⑥⑦で「メ五貫五二九匁八分午之元利」として同じ金額を記している。

結局、これだけが借金として残ったことになり、これについて

内 一銀一貫三三三匁七分九厘、午ノ年村中より出銀。
 残四貫二二六匁
 未之元銀
 一銀八四三匁二分
 未之利銀
 メ五貫五九匁二分一厘
 内 一、二匁五分
 市村与左衛門、同善七より寄進。
 一、二貫目 未之年免二入。
 残三貫五六匁二分一厘……
 太郎郎兵衛門口入。

と記載がある。そして、
 ⑧「一帳四冊 内(前記四冊：略) 正徳三巳ノ七月 八幡宮建立時」で終わっている。

以上のいきさつをみるに、残った借金五貫五二九匁八分に対して、翌年村中より出銀して一部を払い、残り四貫余を次の年におくり、それに利がついてまた五貫余になつてくる。ここで結局、二貫を「免二入」という形で、年貢に入れて徴収したと考えられる。しかし、最終的に残つた三貫五六匁一厘は、庄屋太郎兵衛口入れとなつている。この場合の口入れという行為は、どんなことか分からないが、おそらく一時立て替えしておいて、機会毎に少しずつ決済するのではなからうか。

以上は、権力の末端機構としての庄屋の二面性を示すものと思える。すなわち、強い庄屋の権力の裏に、強い財政力があつたことを物語つて

行政機構・金融体系の未完成な時代、しかも「米遣いの経済」といわれる時代、現金収入のもとである換金作物を栽培できる者は限られている。村の財政運営はどうしても、一部の富農層に頼らざるをえない。まして、宮座・宮衆によって運営される神社など、富農階層の力の見せどころであつたと思う。こうした封建的階級制に支えられた、三〇〇年の平和が日本の近世社会であつたので

はなからうか。なお、この当時の金利はいくらぐらいか。

午年の場合は、元利合計五貫五二九匁八分のうち利子は七一六匁二分なので、元金は四貫七九七匁四分となり、利率は約一割五分位になる。

未年の場合は、元金四貫二一六匁一分に対し、利子は八四三匁二分なので、利率約二割になつている。

どのような金融の仕組みがあつたのか、具体的なことは残念ながら分からない。今日では分からない仕組みが、いかに多いかということをおもひ知らされた史料であつた。

最後に、参考のため現在の金額に

『備後古城記を読む』

——中世を読む会——

毎回、約一五名の精鋭会員が参加する、備陽史探訪の会で最強の学習会です。中世の備後の武將と山城に興味のある方はぜひご参加下さい。

〈実施要項〉

日時 四月一五日(土) 午後七時
 場所 中央公民館2F視聴覚室
 座長 出内博都(城郭部会部会長)
 テキスト代 千円(既購入者不要)
 資料代 一〇〇円程度

するといくら位になるか記しておく。銀五〇匁が一両、一両が七万円とすると、総経費六貫六一五匁七分五厘は一三三・三二一両で、九二六万円余りとなる。

(換算は雑誌「歴史と旅」平成七年三月号所載、河合敦論文によつた)

第四回郷土史講座

文献から見た古代の戦い

——古代の反乱伝承と城——

中世・戦国時代の戦いのイメージは多くの歴史小説や時代小説、あるいは最近のビジュアル化された図録出版物などでおおよそつかむことができます。

しかし、古代の戦いについては、実際にどのように行われたか、あまり知られていないように思います。たとえば、どのような武器・器具を使用したのか、古代の山城はどういう形態をしていたのかなど、それほど一般的ではありません。

そこで、今回は考古学の成果を踏まえ、文献で知ることのできる古代の戦い(壬申の乱、磐井の乱、吉備の反乱伝承など)を中心に七森さんにお話しいただきます。特に長年の研究テーマである古代山城については、最新情報が期待できます。ぜひご参加下さい。

〈実施要項〉

日程 四月二日(土)
 時間 午後一時三〇分から
 場所 中央公民館2F会議室
 講師 七森義人(事務局長)
 費用 資料代一〇〇円

雨乞法界石

小林定市

昨年春は晴天が続き、空梅雨の異常渇水となり、テレビや新聞に各地での水不足と雨乞が多く報道された年であった。

福山市水呑町では昔から、日蓮宗寺院が多かったことから「水呑千軒丸法華」と呼称されてきた土地で、水呑小学校の南、重顕寺の登り道の辻脇に、雨乞祈願を彫り込んだ巨大な法界碑が建っている。

碑の総高は約四m、台座の高さは約一・四m、竿石は角柱(五五cm角)高さは約二・六mで、石塔の正面中央に力強い髭題目と蓮台、左面に和歌、右面には安政三年(一八五六)の祈雨の刻文がみられ、石塔の四面には次の文字が刻まれている。

(正面)

南無妙法蓮華經(蓮台)

(向って左)

盛祈 君賀代農民を恵三亭久方能
雨端 雲與梨傳う法迺雨可那

四海唱導賜紫日栖

(裏面)

鞠 藤原文造作

(向って右)

安政丙辰五月大早祈本村清光山重顕

寺曼荼羅日像菩薩之親筆有感應村民有謀建此石以顯勝徳親筆應長元年開山行公始受而傳之至今聖人日迅三十四世五百四十六年 備後水呑村民建

芦田川から吐出された土砂が福山湾に堆積し、福山城南部の野上新涯村・多治米村・川口村等の堤防が築堤されたことから深津郡が西側に次々に拡張されたことで、芦田川河口流路が西寄りに定まると土砂は水呑村沖に流れ、芦田川下流の水呑村中央部の地先に土砂の堆積が進行し、

文政七年と文政十二年(一八二九)に新涯が築造されて三五町歩余りの新田(大川上新田・大川下新田)を完成させている。

元来芦田川は夏期ともなると、水稻用水が不足する川であった。下流の新涯ともなれば、最初から用水に恵まれないことを承知の上で築造された新涯であることから、最大の急所は干魃による干害だったのである。

安政三年(一八五六)の大干魃に重顕寺三四世の日迅は、二〇余年前に完成した新涯堤防東南尖端の一本松に、開基日像の曼荼羅本尊(曆応五年銘・一三四二)を掛けて日迅が導師となって祈雨の祈願をしたところ、満願の日に豪雨が降るといった

効験があったことから、村民は勇躍して碑の建立に立上がったもので、また、応長元年(一三二一)の開山とは、重顕寺が真言宗から日蓮宗にし轉宗した年であることから、備後国の日蓮宗寺院で最古の由緒を誇る寺で、干魃の前年にあたる安政二年六月に、重顕寺の本山である京都妙顯寺に寺格昇進の願書を提出していたところ、願の筋が許諾され、京都妙顯寺四七世の日栖から曼荼羅本尊と紫金欄着用の許可を賜ったのである。

日蓮宗の法界塔には種々な形をしたものが見受けられるが、特徴は正面に必ず「南無妙法蓮華經」の髭題目が彫られていることで、日蓮は、南無妙法蓮華經の七文字題目を唱えると、誰でも菩薩になれると断じて題目を本尊としたのである。

題目が刻まれた古石碑には、鎌倉時代作の題目板碑(平板石の頂上を山形に作り、その下に二段の切り込みと額部を作る)には一遍首題・題目二尊・十界曼荼羅にと順次変化がみられ、板碑本尊が法界塔の源流になつてものと考えられ、江戸時代中期に至ると題目の下に法界の文字が刻まれた塔が多くなる。

髭題目の文字は、仏さまの知慧と

慈悲が四方に拡散する様子を文字に表わしたもので、髭題目の文字は法の字を除いてみな左下の方に延ばすように書かれているが、雨乞法界の題目は、髭先が天上に向つて伸びている珍しい大法界塔である。

参考文献「法華香る」 重顕寺刊

恋の呉線經由

後藤匡史

ここは三原市(見晴らし)の良い所である。

初春から、恋の寄こ須波は幸嶮がよい。

でも、忠海(只の生み)に、しない為にも、あ安芸長(氣長)に浜茄子の花の様に顔を赤くして、この恋、大乗氣。

しかし、お金を、これ竹原(私)つても駄目なら、お吉名さい。

あ安芸津い世の中。

恋風早く吹いても、この身体は安浦(売ら)ない。

安登く(後々)いつ川尻びんに、なつてもほんとうに方が、つくまでの辛抱。

ああ、疲(疲勞)こんぱい。

もう最後の阿賀き。

誰か私に命呉ない?

何んだ天下のし後藤氏(仕事士)に、この様なことを岩下(云わした)のは:それは千枝子さん!!

日本武尊はどちを渡る

柿本光明

深津、安那、品治地方の地にはじめて先人が足跡を残し、住まいを構えたのはいつごろであろうか。まだ確かな証拠が発見されていないが、数千年前、まだ農耕文化の渡来しない、専ら山野に獸を追い、海に漁りなどをしていた原始時代、この付近は海水がはいり込み、現在の平野部は全て海で、わずかに山裾に住まいしていた程度であった。

紅葉の散りし山路を、枯れすすきを分けて登りつめた黄葉山の頂、神辺城の跡地にたたずむと、農耕地の稲田は刈りとられ、北の山脈は頂をそろえ、神辺平野に夕陽が落ちる。南は千田の集落、蔵王山の山なみ、その山なみの北の一角から一すじの芦田川が大きく蛇行して海にそそいでいる。この山なみで囲まれてた盆地こそ、かつての穴の海である。

古代のこの地方の地勢を概観すると、現在の千田町、神辺町川南と竹田から高屋、井原を経て東へ目をやれば、木之子、小田、矢掛などの備中の南部が一つの島となっており、その島と山陽道側本土との間に長い水道(瀬戸)をつくっていた。そし

て、その東口は備中の高梁川の河口付近に開き、西は芦田川流域の平野部にまで湾入していたものと思われる。つまり、芦田川、高屋川および小田川の東に沿ってある平地・小平野は、古代においては、全て穴の海の水道(瀬戸)だったのである。

穴の海およびその周辺の地形の大勢は前述のとおりであるが、この水道や海に流入した主な川は、備後の芦田川、備中から備後に流れている高屋川と備中の小田川である。

芦田川はこの海の西部に流入し、小田川と高屋川は殆ど並んで水道の中央部に流入していたと思われる。年代が進むにつれて、小田川・高屋川とも徐々に土砂を水道の中に吹き出したであろう。こうなると、全体の地勢から考えて、小田川は東方へ高屋川は西方へ流れたと思われる。このように小田川と高屋川が、各々東西に分れて流れると、いずれも相当急角度に方向転換しなければならぬ。それは両川とも、水道にほとんど垂直に流入しているからである。川流が屈曲すれば、その流し出す土砂は屈曲部において屈曲の外方に堆積する。これが土砂堆積の法則である。小田川と高屋川との場合は、その中間にあたる出部村の部分に最も

多くの土砂が、急速に堆積することになる。恐らくこの部分が最も早く土砂に埋められて、陸地となつものと推断される。

土砂のために水道が中断されたとすれば、南部の大きな島は山陽道本土と陸続きとなり、遂にはその一部となつた。そしてこの地以西に一大湾を形づくることになる。この湾をこれから穴海と称し、これが「備後の穴海」の出生である。

穴海には島が三つあつたであろう。穴海の中央にあつた大きな島は、今の湯田の山王山と要害山の一帯の山がそれで、この島は何時の時代からか五箇手島と呼ばれるようになった。五箇手島という名称はこの地が陸地になつた後までも伝わつたといわれ、「備後古城記」などにもこの山のことを五箇手島と記してある。他の二つの島は今の片山と碓山である。その大きさは、現在同様小さいものであつたであろう。

穴海の湾口を出るとその左の方は千田、坂田、久松台の南岸付近、右の方は郷分、津之郷付近から水道になつて西へまっすぐに松永湾に通じていた。今、国道二号線と山陽線は、この水道が埋もれて陸になつたとこのを走っている。つまり、神島、赤

坂早戸、草戸、瀬戸など南部の沼隈半島は、大きな島であつた。

今の松永湾から穴海の湾口に直通する一條の水路があつたということとは、今日においては考えられないことではあるが、それは穴海と同様確かなる根拠があるのである。

穴海が歴史にとりあげられたのは神武天皇東征時代以降であると思われる。

備後地方の穴海に対し、悠久の時の中、中国山地や吉備高原の谷をうがち、中国山地の隆起とともに誕生した旭川は、今日まで歳月をかけ、平坦な大地を刻み、故郷の源風景を形作つた。今、海を望むべくもない吉備津、津島などの地名に付く「津」は、港や岸を表す文字。

過去そこが海に面していたことを示し、この内海が島に囲まれた穴のような風景だったことから古代人はこれを「吉備の穴海」と呼び、その名は「日本書紀」や「古事記」にも登場する。すなわち、「備後地方の穴海」に対し、ともに有史的内容を有することになったのは、わが国、最古の史的文献「古事記」「日本書紀」が神武天皇東征を記すにいたつたからである。

さて、ここで問題になるのは「日

本書紀」の景行天皇二十七年一〇月の条に、日本武尊が熊襲征伐をおえての帰途、穴海を渡ろうとされたところ悪神がいたのでこれを殺したという記事があることである。大和政権の全国制覇の過程で瀬戸内の交通確保を主目的とした武力制圧を総合的に象徴したものと思われるが、これは、はたして「備後の穴海」か「吉備の穴海」かということになる。

日本武尊（小碓命）は景行天皇の皇子であるが、母は孝霊天皇の皇子で吉備臣の祖とされている若建吉備津日子の女、針間之伊那毘能大郎女であると「古事記」は記している。

これらの天皇と吉備臣と日本武尊と結びつけて考えるとき、大和政権に先に帰属していた吉備勢力の象徴とも見られる日本武尊によって「備後の穴海」中心の住民は吉備のあとから帰属させられたものと推測される。江戸時代の「備陽六郡志」（外篇・安那之一）には次のようにある。

元藤沼、古此辺は海にて有名な沼になりて、今は川北、川南、十九間や、徳田に経かりて渺々たる深田となれり。

「福山志料」（巻之十四）には、穴ノ海ハ今ノ手城水呑ノ海、山手、中津原、神辺諸村マデ曲リ入シ所

ヲ云也……とある。

「西備名區」（卷之二十九）では海枝西北二曲リ入ル事、二里ハカリソノ形洞穴ノ如シ……徳田村ノ南二浜ト云所アリ道上ノ南二浜田ナリト云處アルハムカシノ海浜ナリシヤ……とある。

特に「西備名區」は、その地域が広範囲である。それによると穴海は山手、郷分と本庄の間より差し入りて、此郡内（安那郡）にては、川北、川南、平野、竹田、八尋、御領沖、湯野は五箇手島の南の尾崎なりし。其廻りなる徳田、箱田、中条、道上沖、北は中野、加茂迄も差し入り、それより法成寺沖これより西は品治郡中嶋、近田、戸手を過ぎ、又北に入る村落の沖、安井、常、宮内中須、広谷、鶏飼より本山、目崎の沖、南は土生、栗柄、相方、福田、品治郡向水谷、大橋、今岡、山守等の沖皆穴の湾の故地也……とある。

戦前の郷土史家、浜本鶴資・猪原薫一・得能世通の諸先生もこれらを受けて継ぐかのように、穴海の所在について記しておられる。

航海術の発達した頃、船舶の好泊地を名をとどめた穴海も景行天皇時代までは続いたのではなからうか。

その昔、神功皇后（オキナガタラシヒメという。仲哀天皇の皇后。応神天皇の母）の三韓征伐の時には船を鞆に寄せられたともいわれ、日本武尊が九州から海路帰路の際は、穴海に船を泊めたが、その後百余年の経過で、穴海は次第に埋もれ水深も浅くなり、当時の兵船を入れるに適さず、鞆を好泊地とされたのではなからうか。奈良朝中期に至っては、穴海の大半は埋没してしまった。ただある程度水深を維持し、船の往來の出来たのは、その西部南岸付近で、その船も沿岸航行の小船で大船は主として穴海湾口外の現在の神島近くに寄泊したものらしい。

穴海のこうした堆積・隆起により陸化したことも、神辺地区に残る地名に「沖」「濱」「渡瀬」「中嶋」「岸」「高淵」「網付」などなど、これをもって昔「穴海」が存在した名残りであると考えられる。前述した岡山県高屋、井原方面にも多くの類似した地名があり、芳井方面にも「淀」「船」などの地名もある。

地名は「土地に刻まれた歴史」ともいわれ、地方の歴史を明らかにするための大切な遺産である。

「日本書紀」などに出てくる、日本武尊の九州遠征の帰路での記述に

海路によつて倭に還る。吉備に到りて穴海を渡る。そこに悪神有り……吉備穴済神……とある。この点について、この穴海は、「吉備の穴海」か「備後の穴海」か大いに疑問である。

第五回郷土史講座

万葉と瀬戸の旅人

歌枕の地を求めて

万葉集は日本人の心のふるさと。その万葉集に歌い込まれた母なる海 瀬戸内海。そして内海を旅する古代の旅人たち。

わたしたちの住む備南の地も見事に万葉歌にうたいこまれていきます。我妹子が見し鞆の浦のむろの木は常世にあれど見しそなき

（大伴旅人、四四六）

道の後深津島山しましくも君が見ねば苦しかりけり

（柿本人麻呂歌集、二四二三）

残された僅かな歌詞を手がかりに、古代の人々がどのような船旅をしていたのか、また、その精神世界はどうであったのか。講師の平田さんが難問に挑戦です。

〈実施要項〉

- 日程 五月二〇日（土）
- 時間 午後一時半～四時
- 場所 市民会館会議室
- ★中央公民館ではありません。
- 講師 平田恵彦（歴史研副会長）
- 費用 資料代 一〇〇円程度

ある山城の譜

松岡 正

文治元年(一一八五)鎌倉幕府は全国に守護地頭制をした。それは、それ迄続いた荘園制度崩壊の第一歩である。備後の守護は土肥実平であり、備後北部に地頭として大田荘(世羅郡甲山町)に三善氏、三谷郡十二郷(三次市)に広沢氏、地毗荘(庄原市)に山内首藤氏が入ってきた。史家はこれを東国武士の西遷と呼び、歴史の時代は古代から中世へと転換していく。

しかし、備後南部にはその数年前、寿永元年(一一八二)に芦田川南六郷(永谷・福田・有地・柞磨・栗柄・土生)を束ねる藤原光雅という武将がいた。彼の出自は遠州(静岡県浜松地方)であるという。光雅は戸釜山(福山市芦田町福田の福相小学校東側の小山)に居城をもった。

そして、六郷に従臣を配する。有地に後藤康経が一二〇〇年宇山城相方に内田藤郷が一一九七年相方城柞磨に菅原光斉が一一九四年滑山城栗柄に徳毛家忠が一一九七年徳毛城土生に杉本信長が一一九七年淵上城をそれぞれ築いて入城した。

福田・永谷は直轄地とし、光雅は一一九六年に市原(福田村亀山八幡神社の南の比高一二〇mの山頂)に城を築いて戸釜山城から移った。新城を利鎌山城と命名し、姓を「福田」と改姓する。(注①)

私は藤原光雅を福田荘(注②)の荘官(荘園領主の代理となつて、現地で荘園を経営する役人)ではなかつたかと考えている。そして、ここである城は戦国期の土塁・曲輪・堀切りなどの防御構築を持った山城ではなく、山頂を小範囲に削り、柵をめぐらす程度のもので、家臣の築いた城々も山頂に物見台をもうけた位ではなかつたかと想像する。また、荘官・地頭たちが荘園を蚕食して自領化するには永い年月を要していることは日本通史の示すところ、その問題には触れない。

利鎌山城主は

福田光雅―光治―光宗―光清―光基―光季

と六代続く。六代城主光季のとき、元弘元年(一一三三)楠木正成が河内国赤坂城(大阪府中河内郡)で挙兵する。備後も桜山城(芦品郡新市町宮内)主桜山茲俊がそれに呼応し

て、備後国内の武士はその動乱にまきこまれるが、そのなかに福田光季は動いた様子はない。(注③)利鎌山城は辺地にあつて、孤高・中立を保っていたのかも知れない。

しかし、中央の情勢は大きく変わっていく。

一一三三年 鎌倉幕府滅亡

一一三四年 建武の中興

一一三五年 足利尊氏反する。

一一三六年 尊氏は官軍に敗れて西走する。少数の尊氏は北九州の多良良浜で九州勢と戦い、奇跡の勝利を得て再度、東上する。尊氏は海路を、弟の直義は陸路をとり、途上の城々を攻めおとした。

この年、つまり建武三年利鎌山城は足利直義勢に攻められ落城した。六代城主 福田従八位遠江守光季は城内で自害し、一族四散、城は空城になった。

利鎌山城の興亡は、鎌倉幕府の興亡と期を一にしている。

福田氏の菩提寺であつた福田寺(福田保育所東の山上)は、慶長三年(一一五九八)に火災があり一山焼尽して廃寺になり、この地の旧小字名を「福田地」として名残りを止めている。この所に「日切地蔵」と言つて土地の人々の信仰を集めている地蔵があるが、その周辺には無数の無縁墓がある。このなかの数ある五輪塔に福田氏一族の霊が眠っていると

言われている。

観応二年(一一三二)「足利尊氏方に荷担し、勲功があつた」として足利義詮から旧松永市本郷町に在城していた杉原信平(注④)に福田庄が与えられる。しかし、杉原氏は高州(尾道市高須町)地頭職を同時に与えられたので利鎌山城へ入つた記録はない。

延文元年(一一五六)に福田庄地頭職を与えられた岡田盛次が利鎌山城へ入城してくる。(注⑤)

岡田盛次は遠江国山名郡の人であつたという。盛次は「建武以来に戦功があつた」として、福田庄五千貫の地頭職を与える」という感状を受けている。宛名は岡田盛次と岡田信次の兄弟名である。兄盛次は重明と改名して第二期初代利鎌山城主になり、弟信次は高須村、関屋城へ移つた。

岡田氏城主は

岡田盛次―盛長―盛政―盛延―盛春―久重―盛清―盛雅

と八代続く。各城主の没年次から見ると、応仁の乱の鎮まつた文明九年

蔵があるが、その周辺には無数の無縁墓がある。このなかの数ある五輪塔に福田氏一族の霊が眠っていると

(一四七七)は四代盛延の頃であり、亀寿山城(新市町新市)宮氏が滅びた天文三年(一五三四)は八代盛雅の時である。

宮氏が滅びたあと、宮氏から分流した有地氏(芦田町下有地の大谷城に拠って一時、大谷姓を名乗り、のち、本文の冒頭で記した相方城に移る)が台頭して隣地を侵食する。

弘治三年(一五五七)利鎌山城は有地隆信の攻撃を受けて落城した。八代城主 岡田遠江守盛雅は討死し、一族の多くは高須村閨屋城へ落ちていった。落城には、戦い上手の有地隆信につられて盛雅勢は出撃する。城内が手薄になったとき裏門から隆信の子、元盛が攻めこんだ。城内の大部分は婦女子で、盛雅の正室「蓮の前」は腰元を督励し自らは男装して薙刀をもって元盛と戦い防戦したという悲話を残している。

岡田氏の末孫三十八代目といわれる芦田町市原の岡田家は昭和二十六年火災にあい、長持ち十数個に収められていた古文書は焼きただれ、いしえをたどる道はない。

山麓の亀山八幡神社にはこんな伝承が語られている。ある利鎌山城主が神社造営のとき、鎮座の地を天意に求めて空に向かって矢を放った。

その落下地点が甲目山であり、その名をとって亀山(甲目山)八幡神社とし、崇敬したという。

有地氏は領有した利鎌山城には、「舎弟を控置者也」として一族の者を城番においた。

時代は分立から統合に向かっている。有地氏は安芸毛利氏へ、そして天下は豊臣秀吉によって統一されていく。天正十七年(一五八九)秀吉による「山城破却令」が発せられ、中世初期から続いた利鎌山城も終焉をつげる。時代は中世から近世へと転換していくのである。

広島県内の山城跡は約千三百カ所、福山市内では約五十カ所あると言う。その多くの城主は興亡流転した。その中で中世の四百年の間、福田氏・岡田氏・有地氏と三期領主が変わったが、その城主の血脈を利鎌山城のように伝えられるものは数少ないであらう。

後記

この小論は大部分を芦田町下有地の内田重徳先生著「松籟」「芦田町散策」に拠っている。長年にわたって研究された先生の郷土史発表の内容容紹介といつてもよい。ただ、一部

には私見によって変更・付記したのもあり、この小論に見出されるかも知れない誤謬についてはご指導願いたい。

内田先生は寛永二十年(一六四三)再改編「備後古城系譜記」(尾道市浄土寺蔵、以下浄土寺本と略記する)に拠っておられる。従って浄土寺本の正鵠が問われるであろう。

明治二十四、府中―栗柄―柞磨―本郷―松永を通る県道開通工事があった。柞磨の滑川峰山城(本文の冒頭の記事で滑山城と記しているのと同じの城)の中腹を掘っていたとき深さ三mの土中から石棺が出てきた。中には石灰詰めにした一体の人体で、石蓋に「明德三年三月四日卒す。徳田信濃守綱朝」との墨書があった。浄土寺本によれば湯舟城(鈴木山入舟城)の第二期二代城主名として「徳田信濃守綱朝 明德三年(一三九八)三月四日卒去す」があり、全く一致する。(注⑥)

従って、内田先生はこの本を重視されている。私も「西備名区」(一八〇四年刊)の著者が、浄土寺本を目に通していたらその記述内容の一部が変わっていたらと思う。しかし、尾道浄土寺は芸州藩領内であった。

注

①同時期(一二〇二年)に対岸の府中にて八尾山城(出口町)が杉原光平によって築かれている。(「日本城郭大系」13)

②福田荘は一二一三年頃には青連院(比叡山)の天台座主の住房。京都市東山区)門跡相伝房領であった。③桜山松俊の記録には「桜山朝臣詳伝」得能正通著、「小説さくら山」片岡修身著がある。

④杉原信平については、田口会長著「備後の武将と山城」(芦田川文庫)六四頁にその名が見える。この頃は、いわゆる「観応の擾乱」と呼ばれる時期であり、再読をお勧めする。

⑤城主岡田氏の記録は、尾道市原田町梶山田に住まれる岡田城主の末孫といわれる方の古文書を整理された駅家町服部の岡田逸一先生著「岡田氏系譜」から引用する。ここを、丁寧に説明すると「松籟」(本文後記参照)には「浄土寺本古城記」と「岡田氏系譜」の二つを並記してあるが、私は後者を借用した。なお、年号は北朝方を用いている。

⑥湯舟城は滑川峰山城より約千m松永側にある。「何故、湯舟城主の墓が滑川峰山城の山腹にあったのか」との疑問は残るが、内田先生は、この頃両城は本城と支城の關係にあったのではないかと推定されている。

赤松氏史跡巡り行動報告

七森義人

朝、遅くなったと言いながら駅裏に向かうと、やはり、かなり集まっていた。

資料を渡すとすぐ出発。広尾に集合した方を拾って山陽自動車道に入る。しばらくして出内さんから赤松氏の説明を上郡町郷土資料館に着くまでして頂く。途中、瀬戸パーキングエリアで休憩し、パーキングエリアとサーブスエリアの違いを運転手の佐藤さんから聞く。

その後、バスは一路郷土館へ。ここで白旗城関係の展示と古代関係の特別展「井の端弥生墳丘墓と古墳」を見学し、野桑登山口へ。途中で道端の公園に寄る。ここが登る前の最後のトイレ。

いよいよ登山開始。これからが本番。集落の中の小道を通り、川沿いの道へ出る。段々と傾斜がきつくなる。休憩。しかし、横に杉が生えているので、すぐ出発。ひばら谷からさらに急になり、ようやく尾根にたどり着く。ここからしばらく行くと堀切があり、郭が左右に見えてくる。ともかく本丸へ向かって歩く。

山頂は風が冷たく、汗をかいてい

たので一気に寒くなり、服を着込む。寒さに震えながら昼食。食後まず三

の丸へ。赤松集落を眼下に望みながら、土塁や虎口、深い空堀を見学。こちらから尾根沿いに城山城へ行くことができる。後、本丸を通り馬場へ。そして犬走りを見ながら二の丸へ。次に井戸跡を見てから、石垣ではなくて石積遺構を見学し、更に下りて大正時代に埋められた空堀へ。このあたりに門があつたようだ。

それから急坂を登り、岩がごろごろとしている狭い見張り台へ着く。赤松集落の方にある「千人落とし」と言われる崖を見て下る。五段郭で自然歩道と合流し、登山口へ向かって歩く。途中雨がパラパラしてきたが、ともかくバスへ向かう。

かなり早いペースで全員下山。また同じ所でトイレ。そのあと苔縄城法雲寺等のあたりを話したりしながら、赤松居館跡へ向かう。

居館跡は幼稚園の敷地と駐車場になり、土塁しか残っておらず、堀があつたらしいが、今はわからない。それと、この土地に苔縄城の碑が立っているが、此処とは違うだろう。

このあと宝林寺へとバスに乗るが、すぐに停車。第三セクター智頭急行の高架下を通り、宝林寺まで歩く。

兵庫県南部地震のため「円心堂」の開館が九月に延期されたので、ガラス越しの見学は残念だったが、とも

かく赤松三尊仏を拝観できた。これで今日の予定はすべて終了。後はただ帰るだけ。しばらくは、バスから見える遺跡の説明。苔縄城は、愛宕神社がある山頂か、それとも、法雲寺の近くあつたとされる千軒家城か、と説明する。

上郡の町中を過ぎ、左側に西野山古墳のある丘を見ながら、この古墳やこのあたりを古代山陽道が通っていたことについて話す。上郡町には古代関係の遺跡は少ないが、赤穂市の有年考古館が戦後早くから活躍し、このあたりの古墳を発掘していたので、上郡郷土資料館もかなり有年考古館から資料提供を受けていた。

バスは、私の思いなどは無視するかのごとく船坂峠へと向かう。我々は右側に峠へと続く自転車・歩行者専用道を見ながら、峠下のトンネルを抜け、三石城を窓越しに見てから備前インターから高速へ入る。

もう私は何処を通っているのかわかりません。もう睡眠のただ中。吉備サーブスエリアで休憩してから福山へ。途中の時間はかなり変更したが、結局到着した時間はスケジュールど

おり。

みんな疲れたが、さあて何を考えられているだろうか。私は最後の締めくくりの原稿がある。「眠い」「書かなければ」この二つの思いが交互に頭をよぎる。ああ疲れた。

気ままに本のつまみぐい

平田恵彦

ほくは本が好きだ。歴史関係の本もそこそこ読む。その中から最近読んで印象に残った本を紹介する。

①「日本の歴史をよみかえす」

網野善彦著 筑摩書房
四年前に出版されたものだが、ほくのような初心者には非常に勉強になる本で、何度も目からウロコが落ちるような気がした。この本では、とくに中世の非農耕民・女性史に焦点があてられている。武将の興亡を中心とした政治史だけでは本当の歴史はわからないということを痛感。

②「剣客商売 勝負」

池波正太郎著 新潮文庫

「剣客商売」シリーズはほくの愛読書で、繰り返し読んでいます。ソフトカバー版で読み、文庫が出てまた読むという具合だ。

秋山小兵衛は「生き方の達人」で

ある。ああ、あやかりたい。「刺客商売全集」三〇〇〇〇円(新潮社)を買うことが今のぼくの夢である。

③ 「古代を考える 近江」

水野正好編著 吉川弘文館

近江一泊旅行の予習用として購入。湖北地域の著述は中井均先生が担当しておられる。個人的には御上神社・三上山や野洲町小篠原で大量に出土した銅鐸に強く引かれた。

④ 「京都滋賀 古代地名を歩く」

吉田金彦著 京都新聞社

これも予習用に注文。それに出内さんの影響も。それはそうと皆さん!地名の「浅井」は「あざい」と読むこと、知ってました?それに「あざ」は「入口」のこと。つまり「あざゐ」とは「文化の入口にいる」の意味だそう。ためになるなあ。

⑤ 「九州戦国合戦記」

吉永正春著 海鳥社

ぼくは旅に出ると、必ずその土地の本屋を覗くことにしている。地方出版の本を探して、自分の土産にするためだ。これは二月に北九州に行ったとき買ったもの。吉永氏は「筑前戦国史」など「葦書房」からも多くの本を出している。

⑥ 「狛犬学事始」

ねずてつや著 ナカニシヤ出版

友人に教えてもらって買った本。

狛犬について、近年これだけまとまって書かれた本はない。全国には実に様々な狛犬があることがよくわかる。狛犬の入門書としてベストだ。

⑦ 「古代工人史紀行 技術の神々」

深沢武雄著 田畑書店

二〇年近く前の本なので注文して取り寄せた。現在でも、企業内に神社が祀られているところは少なくない。踏鞴師の金屋子神など、古くから職人が祀る神(職能神)は様々だが、これを祀る神社の探訪記。ぼくの旅行計画の参考書になった。

⑧ 「中空構造日本の深層」

河合隼雄著 中公叢書

深層心理学の本だが、「古事記」の研究・理解には必読の書。造化三神の意味がたちどころに解ける。

また、天皇制を考える上においても重要な示唆を与えてくれる。

⑨ 「日本語に探る古代信仰」

土橋寛著 中公新書

ぼくは以前から「三種の神器」は単に天皇権の象徴というだけではなく、一種のマナイズム(霊力崇拜)ではないかと考えている。この仮説を補強する上で大いに参考になった。

⑩ 「播磨学講座一神は野を駆けて」

姫路独協大学編 神戸新聞社

地方紙の中でも神戸新聞は最も出版に積極的だ。中国新聞も見習って

??何でも質問箱??Q&A

福山市駅家町弥生ケ丘で壺棺が出土したといいますが、壺棺と壺棺との違いについて教えてください。

また、壺棺は北九州に多いと聞きますが、壺棺の出土分布には特徴があるのでしょうか。

(質問者 松岡正さん)

A お尋ねの件ですが、壺棺と壺棺の両者を比較してみましよう。

まず「壺棺」ですが、遺体の埋葬に日常使用している壺を利用したものは、すでに縄文時代から見られ、小児用の棺だと考えられています。ところが、北九州を中心に、弥生時代の中期に発達した壺棺は、日常使用する容器として制作されたものではなくて、成人を埋葬するための棺専用として制作されています。

そして一般に、壺棺は「吉野ケ里遺跡」のように群在して墓地を形成しています。

次に壺棺には、板や石で蓋をした単棺と、壺と壺あるいは壺と壺とを合わせた合口壺棺の二種類とがあります。

北九州の弥生文化を特徴づけている大陸性の鏡や青銅器の武器などは

ほしい。播磨学講座は1、3まで。1は古代編。不謹慎だが、大震災前に手に入れておいてよかつたと思う。

そのほとんどが壺棺から出土しています。焼き物の棺ですから残り方もよく、しばしば新聞などに報道されて話題を呼んでいます。

また、青銅器や鉄器を副葬した壺棺墓地のあり方から、一定の地域内で政治的なまとまりのあったことも想定されています。

一方「壺棺」の方は、弥生時代になつて壺を棺として利用した例が多くなり、ほぼ全国的に出土例が見られます。その大きさから見ても、多くは小児の棺として使用されたと考えられています。

以上、適切な答えになつていないかもしれませんが、参考にして下さい。両者を比較研究した論文は余り見ませんが調べてみると面白いことがわかるかもしれませんよ。

(回答者 山口哲晶副会長)

??何でも質問箱??Q&A 素朴な疑問大募集!

歴史についての素朴な疑問に、わが会の優秀な?スタッフが会報誌上でお答えします。ハガキに質問を書いて(原則として一枚に一問にして下さい)事務局までお送り下さい。ただし、耶馬台国はどこにある?とか難しすぎるものはダメですよ。

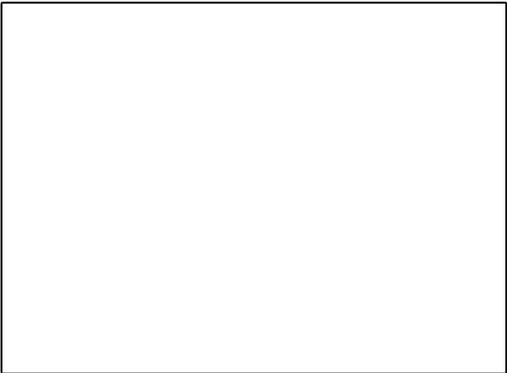
新入会員紹介

今年中になんとか二五〇名を超えたらいいなあ、と思っております。皆様のご協力をお願いします。
前号のあと次の方々が入会されましたのでご紹介します。

CONFIDENTIAL
備陽史探訪の会
個人情報が含まれるため掲載できません。

事務局日誌

二月四日(土) 第一一回古墳講座。
「備後の原始・古代を探る(上)」
弥生期の遺跡のありかたについて激論を交わす。参加一二名。
二月一日(土) 第五回「古事記」を読む。参加三二名。一般参加者と女性が多いのが特色になった。この時、寺崎さんご夫妻、藤井重子さん入会。
☆終了後「山城志」と会報63号の発送作業。多くの方が手伝って下さり感謝、感謝。
二月一六日(木)「山城志」12号発



刊の記者会見。市役所記者クラブにて。参加二名。
二月一八日(土) 第一〇回「備後古城記」を読む。参加一八名。
千田町、蔵王山。平賀氏について小島袈裟春さんの「神辺城弓矢の対決」での新説が議論的になる。この時、藤井清司さん入会。
二月二五日(土) 第二回郷土史講座「巨大古墳の謎を探る―三ツ城古墳を中心として―」講師 網本善光さん。参加三七名。会場市民会館第一会議室。この時、下江曉さん、佐々木弘さん入会。
三月四日(土) 第二二回古墳講座「備後の原始、古代を探る(下)」参加二一人。古墳講座は大団円。次回からのパート2に期待。
この時、佐々木高志さん入会。
三月一日(土) 第五回「古事記」を読む。伊邪那岐神・伊邪那美神について学ぶ。参加三二名。このとき佐藤壽夫さん入会。
☆終了後、行事案内発送作業。
☆役員会 参加一三名。「古墳巡り」と「記念行事」について議論。
三月一八日(土) 第一一回「備後古城記」を読む。参加一八名。
田口会長が担当。熱弁やえる。この時、前原肇さん入会。

三月一九日(日) 赤松氏の史跡巡り。坂のきつさに青息吐息。でも征服後のビールは格別。参加五三名。この時、岡部トシさん入会。

バス例会 中世太田荘の残像

―今高野山に春霞たなびく―

平安末期の平重衝から戦国期の上原元将まで、太田荘を巡ったの権力闘争は「一生懸命」に生きる多くの武将の生きざまを如実に反映しています。今回の例会は、そのありし日の栄光の「太田荘の残像」を求める旅です。
充実した一日にしたいと思っております。ぜひご参加下さい。

*見学コース

河佐(橋崎氏史跡)―八田原ダム―伊尾(橋氏屋敷地・下津屋十二坊跡・尾首城跡)―今高野山竜華寺(県史跡)・今高野山城跡(上原氏居城)―万福寺跡(県重文・層塔)―康徳寺(寺跡・康徳寺古墳)
〈実施要項〉

集合日時 四月一六日(日)
午前七時四五分(雨天決行)
集合場所 福山駅北口(福山キャッスルホテル前)
参加費用 会員二七〇〇円 一般三〇〇〇円
講師 田口義之会長
申込受付 現在受付中
その他 弁当・飲み物持参。山歩きの出来る格好で参加。

バス例会 古代吉備不思議旅

ミステリーツアー第三弾!

—熊山遺跡を中心として—

ついにあの「熊山遺跡」に登ります。

①熊山遺跡とその周辺

何も説明する必要はないでしょう。

「熊山遺跡」こそ、まさに「ミステリーツアー」の名にふさわしいといえます。古代史に興味を持つ人ならば、誰でも一度は実物を見てみたいと願っているはず。また、ここは児島高德が倒幕の兵を挙げた地としても有名で、関連する宝篋印塔等も残っており、中世史ファンにも満足して頂けると思います。

②国宝 関谷学校

「清例」とはまさにこのような場所をいうでしょう。奇跡のような場所。

新緑に映えるレンガ色の備前焼の瓦屋根、国宝の講堂が私たちを迎えてくれます。鏡のように磨かれた床や柱の美しさには言葉もありません。また、全長七六五mに及ぶ切り込みハギの石垣も見事です。

③福生寺

熊山遺跡の登山口にある寺院です。私たちが探訪する頃(六月)には、見事な紫陽花が満開です。

④牟佐大塚古墳

牟佐大塚古墳、こうもり塚古墳と

並んで「岡山県三大巨石古墳」のひとつとして有名です。石室の全長は一七mを超え、羨道が玄室の二倍以上あるのが特色です。玄室内には、巨大な貝殻凝灰岩製の家型石棺が置かれています。石室は、探訪した全員を一度に飲み込むほど巨大です。

⑤万富東大寺瓦窯跡

赤磐郡瀬戸町万富にある瓦窯跡。

鎌倉時代の東大寺再建に用いられたとされ、出土の軒瓦には「東大寺大仏殿」、平瓦に「東大寺」の押印があつて古くから注目されてきました。

その他の主な探訪地予定地

・西宮山古墳 備前国分寺跡

・和気神社など

〈実施要項〉

集合日時 六月一日(日)

午前七時四五分(雨天決行)

集合場所 福山駅北口(福山キャッスルホテル前)

参加費用 会員四五〇〇円

一般四八〇〇円

講師 種本実さん、平田恵彦さん

申込受付 現在受付中。四月二十八日(金)まで受け付けます。

その他 弁当・飲み物持参。山歩きの出来る格好で参加。

今回の例会は費用が四五〇〇円で、やや割高です。それは「熊山遺跡」には中型バスしか上がれないからです。そこで、異例ですが、早めの募集をし、その上で実施するかどうか決めることになりました。

①六〇名以上の応募があつた場合

予定通り実施します。私たちは実現できることを願っています。

②三〇名〜五九名の応募の場合

バス例会としては実施しません。ただし年内に「歴史民俗研究部会」の特別企画として、日を改め(六月一日以外)に、規模を縮小して実施します。実施日は後日連絡します。

③二九名以下の応募の場合

残念ながら中止とします。

☆②③の場合、六月バス例会は別の企画を五月号案内に発表します。

徹底的に「古事記」を読む

歴史研主催の講座「古事記」を読む―第八回は引き続き伊邪那岐神・伊邪那美神を中心に学習します。

〈実施要項〉

日時 五月三十一日(土)午後二時

場所 市民会館2F会議室

中央公民館ではありません。

ご注意下さい。

講師 神谷和孝(名誉会長)

平田恵彦(副部会長)

テキスト代 千円(既購入者不要)

資料代 一〇〇円程度

会報第65号原稿募集

六月中旬発行予定の「備陽史探訪」創立15周年記念号の原稿を募集します。歴史論文、短歌、俳句、例会参加感想文など内容は問いません。

原稿用紙に夕テ一六字で書いて下さい。行数は本文一二〇行(タイトル・氏名四行ぶんは別扱い)でちょうど会報一頁分になります。

今回は、できるだけ多くの人に書いていただきたいので、「頁以内で書いて下さい」。

締切りは五月二十五日(金)、原稿の送り先は事務局です。

『山城志』第13集原稿募集

今年一二月発行予定の「山城志」第13集の原稿を募集します。

内容は日本史・郷土史に取材した論文、論考、随筆、紀行文、小説などです。

枚数は、四〇〇字詰原稿用紙に夕テ書きで三〇枚以内(ワープロ原稿は一行字数を三二字に設定して下さい)。行数は三七五行以内)です。

原稿締切りは五月末日ですが、予定した量の原稿が集まらなかった場合には、随時締切り日を繰り下げます。原稿の送り先は事務局です。

備陽史探訪の会創立一五周年 記念行事の大綱決定!

三月一日に行われた役員会において、創立一五周年の記念行事の大綱が次のように決まりました。

①記念講演会

草戸千軒町遺跡調査研究所と共催
日程 五月二七日(土)
時間 午後二時～四時

会場 広島県立歴史博物館講堂
講師 中井均先生

中世山城・城館研究の権威
(滋賀県米原町教育委員会)

演題 「考古学から見た中世城館」
—特に戦国時代を中心とした城館

の実像を探る—
会費 無料

★記念講演会是一般の方の参加も自由です。

②記念祝賀会

時間 午後六時～八時
会場 福山ワシントンホテル
会費 七〇〇〇円

その他 表彰。アトラクション等。

★祝賀会の出席者全員に備陽史探訪の会編著「山城探訪—福山の山城三〇選—」(会員頒布価格千円)を無料配布する予定です。

★詳細は次回行事案内(五月六日発送予定)に掲載します。

中井均先生から手紙

講演内容の詳細わかる

創立一五周年記念講演会の講師、中井先生に講演内容をお尋ねしたところ、次のお手紙を下さいました。

演題 「考古学から見た中世城館」
—特に戦国時代を中心とした城館

の実像を探る—
内容 近年、中世城館跡の持つ情報

量の豊富さに着目され、文献史学・考古学・歴史地理学など多方面から

のアプローチがさかんにおこなわれている。従来城郭研究は、縄張り研

究が主流であったが、数多くの発掘調査の結果、地表面からでは、考え

もおよばなかった遺構(施設)が検出され、中世城館像は、大きく塗り

変えられようとしている。
今回の講演では、こうした発掘調

査の成果と縄張り研究で得られた成果を紹介し、中世城館(特に、世紀

後半の戦国時代を中心に)の実像を探ってみたい。

また、こうした研究の方法で、広島県下の城館について、事例検討も行いたい。

五月二七日の講演会が楽しみです。博物館講堂を満員にしましょう。

第13回親と子の古墳巡り

(福山市教育委員会後援)

毎年恒例となった「親と子の古墳巡り」。今年は、神辺町中条の大坊

古墳(古墳時代後期、横穴式石室の円墳、県指定史跡)から安光古墳群

(古墳時代後期、カンカン石古墳など)を経て、そこから加茂町にある

石鎚山古墳群(古墳時代後期、竪穴式石室をもつ円墳)、猪の子一号古

墳(珍しい横口式石槨をもつ終末期古墳)を巡るコースを歩きます。

古墳巡りを終えた後は、加茂公民館でスライド上映を交えた簡単な古墳講座を行い、現地で解散します。

〈実施要項〉
集合日時 五月五日(子供の日・金) 午前九時(小雨決行)

*本格的な雨の場合は五月七日(日)に順延します。

集合場所 福山駅南口「釣人の像」

*現地に近い方は中条の「八幡神社」に午前一〇時集合して下さい。

解散場所 現地(加茂公民館)解散。

参加費 大人五〇〇円、子供三〇〇円(資料代、保険料等実費)

*小学生以下の参加は保護者同伴が原則です。

申込方法 往復八ガキに、参加者全員の氏名・年齢・住所・電話番号を

記入のうえ、四月二十八日までに(必着)事務局にお送り下さい。

交通費 定期バスを利用しますので各自で負担していただきます。

井笠バス「中条」行「宮の下」下車。大人五四〇円、子供二七〇円。

★五月の「古墳講座II」は休止いたします。ご注意下さい。

平成七年度会費納入について

今年度会費をまだ納入されていない方は、同封の郵便為替をご利用いただき、今月中にご納入下さい。あるいは会の行事の際、ご持参いただいても結構です。

年会費は個人会員三〇〇円、夫婦・親学会員四〇〇円です。

請求は今回が最後です。もし、今月中に納入されない場合には退会されたものとなります。

編集後記

「地下鉄サリン無差別殺人事件」には誰もが戦慄した。近年、考えられないようなことが次々と起こる。いま、わたしたちは歴史の転換期を迎えようとしているのでは……。

備陽史探訪の会事務局
〒七二〇 (五三) 六一五七
福山市多治米町五一九一八